

# 博士号取得報告書

2015年度 FOS 奨学生 福井真夫

## 1 親友

パブロは、博士課程のほとんどの時間を共に過ごしたとても気が合うクラスメイトだった。1-2年目は授業を隣で受け、宿題を一緒に解き、四六時中、マクロ経済学の話をしていた。お互いに興味の湧いたトピックについてあーでもないこーでもない議論を重ねる毎日が楽しかった。しかし、3年目に入るとお互い、表情に影を落とす日が多くなった。博士論文を書き上げなければならないというプレッシャーが日に日に強くなっていったからだ。主となる博士論文は単著であることが要求されるため、研究は孤独なプロセスだった。僕は、なかなか「これは面白い」と自分が腹の底から信じ切れる研究トピックが思いつかず、煮え切らない日々を過ごしていた。そうしている間にも時計の針が進んでいるという事実が、抑鬱した気分を拍車をかけた。パブロも同じだったと思う。「研究って、難しいな」と二人で愚痴を言い合った。それでも、そうした日々から抜け出そうと、「こういう研究アイデアはどうだろうか？」と毎日、議論をぶつけ合うのはやめなかった。

3年目も終わりにになると、僕の中でどんどん焦りが強くなっていった。その結果、パブロの持ち出す研究アイデアにどことなく否定的な意見を言いがちになっていった。自分の親友が博論に勝機を見出して、彼に置いていかれてしまうのが怖かった。否定的な意見を返すと、その度にパブロは落胆していた。そのうち、パブロは、オフィスに来てオンラインゲームに没頭するようになってしまった。僕も毎日、気分は優れなかったが、研究を進めていないパブロを見てどことなく安心する気持ちすらあったように思う。

4年目に入ると、「俺に研究は向いてないよ。この夏、テック企業のデータサイエンティストのインターンに応募してみようと思う。」とパブロは僕に告げた。僕は止めなかった。彼が経済学を心の底から好きなのを知っていたし、アカデミアに向いていると思っていたにもかかわらずだ。自分の中の焦りが和らいでいくのに気がついた。インターンから帰ってくると、「企業で働くのは最高だよ！俺のことを常に気にかけてくれる上司がいるし、同じゴールに向かって一緒に頑張ろうとするチームメイトがいる。研究と違って全然孤独じゃないんだ。」と息を吹き返したような笑顔で話しかけてきた。

彼は結局、5年で卒業して、テック企業でデータサイエンティストになった。僕はというと、企業で働くのに向いていないという確信があったため、企業就職は考えなかった。ただ、僕が研究で苦しんでいることを察して指導教官らが積極的に助けになろうとしてくれた。ある日、僕が煮え切らない研究アイデアを話しにいくと、「それは面白い」と強く背中を押してくれた。研究が孤独なプロセスじゃなくなった気がして、嬉しかった。結局、それが博論になり、6年で卒業してアカデミアに残ることになった。

お互いが卒業してから、久々に話す機会があった。パブロは仕事も家庭も順調で幸せそうだった。そんな会話の中、ぽつんと「やっぱり経済学が恋しいんだよね」と切り出し、「博士課程がもう少し孤独じゃなければ違ったのになあ」と続けた。指導教官が僕にしてくれたように、どうしてあのときパブロの研

究アイデアの背中を押さなかったのか。オンラインゲームに没頭し、研究を諦めて企業インターンに行く親友をどうして安堵しながら見送ったのか。矮小な自分に心の底から嫌気がさした。